

|       |       |
|-------|-------|
| 普及項目  | 養殖    |
| 漁業種類等 | 養殖業   |
| 対象魚類  | シカメガキ |
| 対象海域  | 八代海   |

## 県南地区におけるクマモト・オイスター養殖指導及び飼育試験について 県南広域本部水産課・上原 大知

### 【背景・目的・目標（指標）】

芦北町地先のクマモト・オイスター（標準和名：シカメガキ）については、夏場の高温期における大量へい死が課題となっている。これまで温湯処理（貝を40℃の温水に1時間浸漬）による対策を検討したものの、温湯処理のみではへい死を十分に抑制することは困難と判断された。一方、他地区ではバスケットを用いた干出飼育により高い生残率が報告されていることから、令和5年度（2023年度）から干潟での干出飼育による養殖試験を実施している。

令和6年度（2024年度）の干潟飼育試験では、地盤高100cm及び150cmの高さに飼育カゴを垂下することで、6月中旬までの生残率が向上したが、7月に大量死が発生した。そこで、今年度は飼育カゴをより高く設置し、干出時間を長くすることで生残率の向上を目指した。

### 【普及の内容・特徴】

昨年度の試験で最も生残率の高かった地盤高150cmへの垂下に加え、200cm及び250cmへの垂下区を設定し、干出時間の違いが生残率に及ぼす影響を検証した。

また、3月及び5月に高さを50cm上げる試験区を設定し、時期により干出時間を調整する手法の有効性について検討した。図2のとおり、計7試験区を設定して生残率の推移を調査するとともに、試験区①、②及び③についてはサイズの測定を行った。

### 【成果・活用】

試験は令和6年（2024年）12月から開始した。7試験区のうち、試験区②、③、⑤及び⑦（地盤高150cm、200cm及び試験期間中に200cmへ変更した区）では、6月から徐々に生残率が低下し始め、11月にはほぼ0%となった。一方で、試験区①、④及び⑥（地盤高250cm及び試験期間中に250cmに変更した区）では、10月まで生残率80%以上を維持することができた（図3）。

しかし、生残率が高かった試験区においても、11月以降に生残率が急低下し、12月下旬で生残率30%未満に落ち込んだ。この生残率低下の原因は不明である。

試験区①、②及び③の成長について、令和7年（2025年）6月時点では、最も干出時間が長い個体ほど大型化する傾向が認められた。しかし、6月以降は、大きいサイズの貝からへい死が発生し、10月時点では、試験区間のサイズ差はほとんど認められなかった。（図4）

今後は、生残率の高かった地盤高250cmへの垂下を中心に再度検証を行う。

【達成度自己評価】

4 目標（指標）はほぼ達成できた（76～100％）



図1 位置図

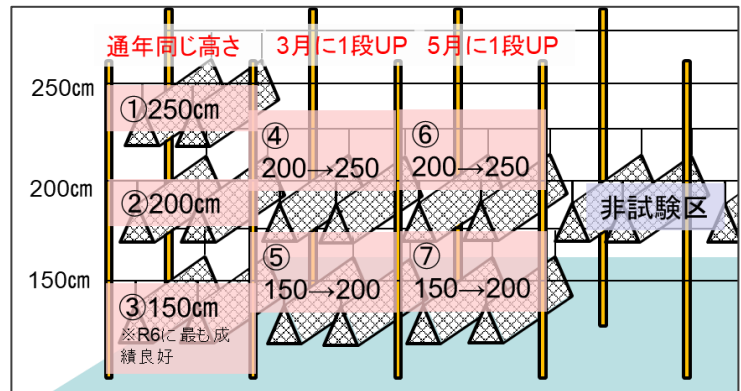


図2 干潟飼育試験のイメージ

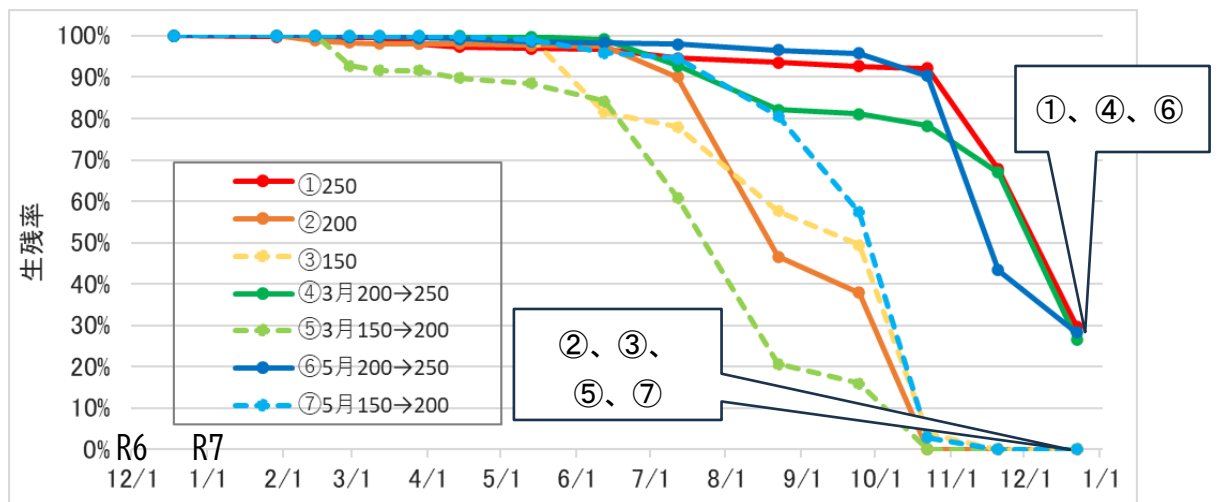


図3 干潟飼育による生残率の推移（凡例の数字は垂下高さ（cm））

| 2025.6.12時点 |        |        |        |       | 2025.10.22時点 |        |        |        |       |
|-------------|--------|--------|--------|-------|--------------|--------|--------|--------|-------|
| 試験区         | 殻高(mm) | 殻長(mm) | 殻幅(mm) | 重量(g) | 試験区          | 殻高(mm) | 殻長(mm) | 殻幅(mm) | 重量(g) |
| ①250cm      | 33.42  | 21.31  | 11.12  | 2.46  | ①250cm       | 40.67  | 23.51  | 10.46  | 5.04  |
| ②200cm      | 40.52  | 26.18  | 10.8   | 4.23  | ②200cm       | 40.97  | 24.16  | 12.07  | 5.69  |
| ③150cm      | 42.05  | 26.1   | 16.23  | 5.08  | ③150cm       | 41.32  | 24.65  | 12.16  | 6.35  |

図4 干潟飼育による貝の成長（各試験区 30 個の平均値）



図5 干潟飼育試験の状況



図6 飼育貝の状況  
(2025. 8. 22 試験区③150 cm)